創られた独裁者：プロパガンダの脅威〈7〉

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2023-09-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大木, ゆみ メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/2000005

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

創られた独裁者―プロパガンダの脅威＜7＞

大　木　ゆ　み

はじめに

まず，今回と次回でジョージ・オーウェルの『一九八四年』（*Nineteen Eighty-Four*, 1949）と宮崎駿氏（以下：宮崎駿）の『風の谷のナウシカ』（1983-1994）を検証し，近年流行しているディストピアとディストピアの構成要因である独裁者と「個」の喪失について考察する。

近年，SF 小説はもちろんだが，既稿で取り上げた作品のような映画，アニメーション，コミックなども含めディストピアを扱う作品が増加している。ディストピアとはユートピアの反対語で，産業革命後に急速に発展した科学技術の進歩に対する懸念から，暗黒に満ちた自由のない，どちらかといえば非人間的，機械的な世界や未来を舞台とし，そこにカルト宗教や集団，全体主義体制といった要素をも含むことが多い。さらに，科学技術の発展による核兵器が現実に人間によって第二次世界大戦で生み出されたばかりか使用されたという事実が原爆以降の世界において，多くの作家にとっての懸念すべきテーマとなり，核戦争を題材とする小説やコミックなどが後を経たない。オーウェルも『一九八四年』の舞台設定や，エッセイ ‘You and Atom Bomb’（1945），友人への書簡などで度々で核兵器の出現後の世界について言及していることからも，彼も核兵器を使用した第三次世界大戦の勃発を懸念していた一人であったと言える。『一九八四年』は原爆がイギリスのコルチェスターに落とされた後の全体主義国家と化したロンドンを舞台とし，民衆は日々，欺瞞と監視に溢れた世界で絶対的指導者ビッグ・ブラザーを長とする党に洗脳され言われるがままに動く，まさにロボットのような無機質な存在として描かれている。藤子・F・不二雄氏の『ドラえもん』の主人公ドラえもんや手塚治虫氏の『鉄腕アトム』のアトムのように人間の心を持つロボットとは正反対の，本来「感情の生物」でもある人間が人の心を失うという複雑な恐ろしい状況を描いている。

作中描かれるテレスクリーンをはじめとする監視装置やシステムは，今や

現実のものとなるばかりか，「ビッグ・ブラザー」や「101 号室」などの登場人物や場所の名称自体が，全体主義（的）やディストピア的な意味を示すに至っている。例えば，日本では放映されていないが，海外で高い視聴率を獲得していた『101 号室』（原題：*Room 101*）や『ビッグ・ブラザー』（原題：*Big Brother*）はまさに『一九八四年』に登場するあの「ビッグ・ブラザー」と「101 号室」のパロディーである。「101 号室」は出演者に彼らが最も嫌う物事を突きつけ，その反応を見る番組であり，「ビッグ・ブラザー」はいわゆるリアリティ番組の類である。出演者たちは監視カメラが至る所に設置されている「ビッグ・ブラザー・ハウス」で共同生活をし，視聴者はその状況を逐一覗き見する。そして毎週視聴者による投票があり，脱落者が決まり，最後まで残った者が勝者となる。当然ながら視聴者はそのタイトルだけで番組の意図――「101 号室」＝拷問部屋（自分が最も嫌うもの＜『一九八四年』においては恐れるもの＞と対峙 させられる場所），「ビッグ・ブラザー」＝監視社会であることを認識している。

これらの番組は視聴者が他人を監視することに楽しさを感じており，同時に，（特に『ビッグ・ブラザー』の）出演者は自らの生活を露呈することを厭わないという奇妙な現象にも注目すべきだろう。SNS を通して生活のあらゆることを露呈すること，そしてそれを見ることを当然としている現代人は，ある意味，オーウェルが生きていた時代よりもはるかに監視社会や偽物の指導者に飲み込まれてしまう確率が高い――いや，むしろすでに自ら監視社会の一部になっていると言えよう。アダム・ロバーツが「Twitter のようなソーシャルメディアは，これまでにない相互コミュニケーションと表現を可能にした。しかし，それにもかかわらず，1990 年代の World Wide Web の発明に伴う，より希望に満ちた世界は実現されていない。オンライン文化は，主に，不安，その中毒性，そして社会において取るに足らない批判やいじめ，炎上戦争，攻撃性，公の恥辱（「呼びかけ文化」），卑劣さ，プロパガンダというように有毒な文化によって特徴づけられる」（*Cambridge*, 272）と述べているように，“in-person”ではなく“online”でのコミュニケーションには利便性というメリットがある一方で，厄介な問題がつきまとうのは現代人ならば理解できるだろう。そしてこのようなオンラインコミュニケーションは，相手を知らずともいわゆる「支配者－被支配者」の関係が簡単に形成されてしまう危険性と，私生活を晒して得た「いいね」の数があたかもリワー

ドや勝者の証であるように，ひたすら「いいね」を求める依存性や承認欲求を刺激する麻薬のような作用を孕んでいる——そのSNSが，『一九八四年』の監視装置，テレスクリーンであることも気づかずに。科学技術の発展の産物であるSNSを含むさまざまなオンラインという形式のコミュニケーションが皮肉なことにディストピアを加速させているのかもしれない。アダム・ロバーツは言う——「おそらくここでの最も賢明なアドバイスは . . . Twitterに今まで参加していないこと，次善の策としては，すぐにTwitterから離れることである」（*Cambridge*, 272）。

1. 二つのAI：ビッグ・ブラザーと墓標

『風の谷のナウシカ』の世界では，墓標なる，いわゆる現代でいう人工知能のようなものが存在し世界をつくっている。既稿で論じたアニメ『PHYCO-PASS』でも世界の支配者はAIであった。コンピューターやロボットの創造者である人間をAIが越え始めることをシンギュラリティと言うが，まさにシンギュラリティした人工知能による人類の支配である。

「火の七日間」によって先文明が滅び，人間が滅びの危機に瀕した時，わずかな生存者が全ての知恵と技術を凝縮して世界を平和に導くべく作り出したもの，それがシュワの墓標である。墓標は先人によって予定された通り世界をつくる。主人公のナウシカたちも，この予定によって生まれた，すでに先人たちが汚した世界の中で生きられるように改造された毒の下でしか生きることのできない人間であり，そのナウシカらを脅かす毒を生む腐海の森は先文明の人間が汚した世界を浄化するための浄化装置であることなど，すべての存在も出来事も，墓標が予定通り実行しているのである。とはいっても，墓標自体はあくまでも啓示として，この秘密を先人より引き継いでいる墓標の守り人であるわずかな人間に知恵と予定を授け，実行させているに過ぎない。墓標はそれ自体では何もできない，つまり墓標の手となり足となり予定を実行する「実行者」が必要となる。その実行者たちにとっては，墓標は神であり，墓標が示す予定は絶対である。

ナウシカは墓標と世界の創造の全てを知った時，この「神」に従うのではなく，神と対峙する。ナウシカが自らを「旧世界の墓標であり同時に新しい世界への希望」（7巻，199）と称する墓標と対峙する時，人間と機械の違いが明らかとなり，ナウシカは，あくまでもプログラミングされた予定を実行

することしかできない墓標を「千年の間に肉腫と汚物だらけになってしまった。（中略）浄化の神としてつくられたために生きるとは何か知ることもなく最もみにくい者になってしまった」（7巻，200）と吐き捨てる。ナウシカの「生きることは変わることだ。王蟲も粘菌も草木も人間も変わっていくだろう。腐海もともに生きるだろう。だが，お前は変われない。組みこまれた予定があるだけだ。死を否定しているから・・・」（7巻，198）というように，人間とは変化し，やがて死する生き物なのである。その中で自然に引き継がれる命は，機械のコピー（複製）とは違い，「個」を持った存在である。たとえ墓標が人間により作られた，人間の記憶を持つものだとしても，予定の実行だけをその生の全てとするものはもはや人間ではない。

『一九八四年』においては，まず舞台となる全体主義国家オセアニアの民衆は「個」を喪失している。全体主義の名の下，個人的な思想であれ何であれ，ありとあらゆる自由が奪われ，党によって決められた規則に従うという，非人間的な，むしろ機械的な日々を送っている。各人の部屋に設置されているテレスクリーンはテレビの機能だけではなく監視装置でもあり，民衆は生きている限り監視から逃れることはできない，まさに‘Big Brother Is Watching You’な世界である。

アダム・ロバーツが「ウィンストンが，悪名が高いあるいは重要人物であり，その転向［党に従うこと］がプロパガンダとして使える可能性があるのならば，このすべての彼に対する時間と注意を注ぎ込むことは理にかなっているのかもしれない。しかし，ウィンストンはアウター・パーティーの取るに足らない人物であり，機械の単なる歯車」（*Cambridge*, 274）と指摘するように，党の上級党員であるオブライエンが，自由と個が奪われた社会で，偶然入手した禁書に感化されてはいるが，具体的な行動力の伴わないウィンストンに多くの時間を費やすのは，いかなる反乱分子も消去するという，まるで機械がイレギュラーを一切認めないような機械的かつ非人言的な処置なのだ。オセアニアの民衆とは，党の完全なる奴隷でなければならない。党が定めた規則や行動を党に従っていると感じるよりもむしろ従っているとさえ感じない，まっさらな人間のことである。つまり「従っている」と感じるならば党に取り込まれていないこと――「個」が存在していることの証である。ウィンストンが党に疑問を抱いていた時点では「個」であり，党にとっては「汚れた」人間であった。だがナウシカの「清浄と汚濁こそ生命」（7巻，200），

人間とは本来「血を吐きつつくり返しくり返しその朝を超えてとぶ鳥」(7巻, 198) という言葉のように，苦しみも悲しみも感じず，疑問も抱かないようなまっさらな人間などいない。いるとすればそれは，もはや人間ではなく自ら学習していくAIにも及ばない初期型の機械に過ぎない。

『一九八四年』の最後, ウィンストンが銃殺される際の「彼は自分に勝った。彼はビッグ・ブラザーを愛していた」(311) という描写はウィンストンの苦痛からの永遠の解放，つまり人間ではなくなったことを意味している。党を恐れながら党と「個」の狭間で悩むことも，拷問の苦痛も，時折蘇る家族の記憶の片鱗に対する一言では言い表せぬ複雑な感情も，何も考えずただビッグ・ブラザーだけを愛することですべての苦痛からは解放されるだろう。だが，同時に自ら考える楽しさも，記憶への懐かしさと母に感じる愛情も，対極に位置する苦痛があるからこそ一層光があたる人間としてのあたたかさも失うことになる。『一九八四年』の結末は，ウィンストンが銃殺されたのかどうか曖昧だが，人間でなくなったウィンストンにとってはもはや銃殺されようがされまいが関係ないだろう。なぜなら痛みも悲しみも欲求もこの世に対する希望すら感じることなどないのだから。それは，『風の谷のナウシカ』の墓標の中で，ただひたすらに知識を産み出そうとしている名もなき博士たちと同じである——ウィンストンは「個」の象徴たる自分の名前すら忘れてしまい，単なるオセアニアの住人となってしまっているだろうから。

2. 虚無との闘い：“The One” and “One of Them”

ナウシカの選ぶ道は，まるで「しばらくして，ジュリアナは敷石の小道をもと来た方へ下っていった。居間から漏れる光の斑点の中へ，家の芝生の向こうの影へ，そして真っ暗な歩道へと。彼女はアベンゼン邸を一度も振り返らずに歩き続けた。そして歩きながら，彼女をモーテルへと連れ帰ってくれるタクシーか自家用車が来ないかと，動くもの，光り輝くもの，生きているものを通りのあちこちに探し求めた。」(Dick, 259) という『高い城の男』(*The Man in the High Castle*, 1962) の結末のようだ。自分の正体と世界の真実を知り，たとえ自分の進むべき道が闇であろうともその闇の中に「動く」「光り輝く」「生きている」ものを探す主人公のジュリアナは，人間が滅ぶべき運命であることを知りつつも，その「滅び」を生きとし生けるものの摂理であると受け入れ「いま」を生き抜くことを選ぶナウシカのようである。

ナウシカは，何度もこの物語の最大の敵である虚無と闘い，「いま」を生きるという結論に至る。作中において，ナウシカの前に度々現れる虚無――亡くなった神聖皇帝ミラルパ（以下，ミラルパ）が影のような姿に転化したもの，あるいは一般的に死神として描かれるような骸骨のようなもの――はナウシカに執着し，彼女の行く先々に立ちはだかる。同時にナウシカの前に度々現れるような具体的な描写ではなくとも，すべての登場人物は，憎しみ，劣等感，恐怖，猜疑心など様々な形で虚無と向き合い，これを乗り越えたものだけが，たとえやがては滅びゆく運命だとしても「生きる」選択をする。そもそも虚無とはナウシカやミラルパに執着し取り憑く死神のような存在ではなく，己の中に潜むトラウマや憎しみ，恐怖，偽善といったような負の存在のことである。ナウシカにとっては世界を背負う運命に対する重圧や，死んでいった兄弟たちの犠牲の上に自分の命があるという罪悪感，そして自分を愛さなかった母への恋慕と悲しみなどが虚無となって襲いかかる。人間としての死後，影となったミラルパは生前死を恐れ，永遠の命に固執し「いま」を生きることを放棄して虚無に食われた。ミラルパのようなものは己の負と向き合った時，この負を回避すべく，新たな武力や独裁政治に走ったり，永遠の命を手に入れるべく人造人間化するなど，苦しみの本質と向き合わず，その苦しみを他者 / 他方へ追いやることで自らは楽な方へと逃げる。だが，虚無はいつまでも追ってくる――虚無は己でしか消滅させることができないからだ。

『一九八四年』においてはオブライエンが虚無の役割を果たしている。オブライエンは，ウィンストンの劣等感や，愛されたいと願う承認欲求の強さを見抜き，刺激をし，最終的には洗脳に成功する。最初，オブライエンは優しさと賢さを纏ったウィンストンの憧れの紳士の姿で登場するが，拷問時には，ウィンストンを取り込むために，彼の傷を嫌というほど穿り返し，ウィンストン自身がはっきり認識していなかった「愛されたい」という想いを露呈させると同時に「誰にも愛されていない」という真実を突きつける。そして唯一ウィンストンを「愛する」者こそがビッグ・ブラザーであると刷り込み，党の奴隷としてしまう。ウィンストンがビッグ・ブラザーを愛した時こそが虚無に食われた瞬間でもある。

ナウシカは終わらぬ戦争と破壊の中で疲れきって，心を通わせる蟲，王蟲とともに死のうとするが，王蟲から生かされる。だが，一度死を望んだ彼女

の心（魂）は，虚無の餌食となりかける。ナウシカを死の狭間から救い出した森の人は虚無（正式には虚無に取り憑かれたミラルパの魂）を共に連れて帰ろうとするナウシカに「闇から生まれた者は闇に返すべきでした」(6巻，77）と告げるが，ナウシカは「闇は私の中にもあります。この森が私の内なる森ならあの砂漠もまた私のもの。だとしたらこの者はすでに私の一部です」(6巻，77）と言い切る。ナウシカは誰からも愛される一方，幼少期に母親に愛されていなかった寂しさ，さらには自分を含め11人の兄弟がいたが，ナウシカのみが生き残ったことにより，自分の「生」は10人の犠牲の下に成り立っているという罪悪感すら感じている。それゆえ彼女はある種の贖罪として，「生」に固執するのだろうが，その固執も含めてすべての負さえも自分の一部であることを認め，生きる決心をする。

一方で，「彼は何が起こったのか思い出せなかったが，夢の中で，どうやら母と妹の命が自分の命と引き換えになったことはわかっていた」(32）ウィンストンもナウシカ同様，記憶の片隅に存在する母親と妹の犠牲の下に自分が今，存在していることを感じている。だが，ウィンストン自身「現在は恐怖，憎悪，苦痛があったけれど，感情の尊厳とか深い複雑な悲しみは全くなかった」(32）と言うように，真実の改ざんと欺瞞の溢れる全体主義国家オセアニアでは，人間らしい複雑な感情は旧世界のものであり，滅びかけた遺産でしかないのである。もし，ウィンストンの母親と妹の確固たる生存の痕跡が残っており，彼の記憶が正しかったことが分かれば，彼は複雑な感情を持ち続けることができたがために党に屈することはなかったのだろうか。否，ウィンストンはどうであれ結局党に屈しただろう。それは101号室での拷問を受けたウィンストンの「ジュリアにやってくれ！ジュリアにやってくれ！僕じゃなくて！ジュリアに！ジュリアに何をしても構わない！顔の皮を剥いでも，骨だけにしてもいい。僕にじゃない！ジュリアにだ！僕にじゃない！」(300）という叫びが物語っている。自分の最大の恐怖と向き合った際に，ウィンストンは自己防衛に走る。そもそもウィンストンは自分が愛していると思っていたジュリアに対しても無意識に自分へのメリットを考慮した上で関わっている。年齢や外見，静脈瘤という持病，子供を持てずに妻と離婚したことなどから男性として自信を失っていたウィンストンは女性として魅力的なジュリアに惹かれる——人間的にではなく男として彼女の肉体に惹かれたにすぎない。一見，ウィンストンとジュリアは国家に対する不信を分かち合

う同志のようだが，実際にはウィンストンにとってジュリアは逢瀬を重ね，持論を聞いてくれて，一人では立ち向かえない弱い自分の共犯者になってくれるという，あくまでも承認欲求を満たしてくれる相手でしかない。無意識的ではあるが承認欲求を満たすことを切望してやまないウィンストンは，結局は自分が不信感を抱く，わずかな意見の違いにも聞く耳すら持たない独裁者ビッグ・ブラザーと変わらない。武力と管理と恐怖で民衆を支配し，その支配に自ら酔いしれているビッグ・ブラザーと党は，承認欲求の塊である。ジュリアがウィンストンの承認欲求を満たす度，自分が「生きている」ことを感じるウィンストンはもはや独裁者であると言えよう。

ウィンストンも，ナウシカも共に多くの犠牲の下に自分の「生」があることを認識してはいるが，ナウシカはただ穏やかな世界を望み，自らが生態系の一部に過ぎないことを理解している。彼女の自己犠牲的な行動はどこかキリスト的な何かを彷彿させるかもしれない。だが，宮崎駿は映画の公開後のインタビューで「[ナウシカを] ジャンヌ・ダルクにするつもりはなかったし，宗教色は排除しようと思っていたのに，結果として，あそこに来て宗教画になってしまったんです。・・・だからナウシカはジャンヌ・ダルクではありません。風の谷のみんなのためじゃなくて自分自身が耐えがたかったから行動したんです。死ぬとか生きるとかよりも，あの王蟲の子を助けて群れにもどしてやらないと，自分の心にあいた穴がふさがらない，そういう人間だと思うんです」(宮崎，472) と，その行動は自らを「神」や「殉教者」として崇めてもらうためではないことを示唆している。ナウシカは自らを「女神」と崇める蟲使いたちに対し――状況から考えると「崇拝の対象－崇拝者」の関係に則って，「女神」であり続ける方が，彼らを動かしやすいだろうが――自らが「女神」ではなく，みんなから忌み嫌われている蟲使いたちと同じ血の通った人間であることを示す。ナウシカには承認欲求がなく，世界のために戦おうとも見返りを一切求めないばかりか，憎まれることすら受け入れている。それは自分が生態系の一部に過ぎないことを理解しているナウシカにとって，世界 / 他者の苦しみは自分の苦しみでもあるからこそ，その言動には偽りがない。ナウシカはどんな苦しみの最中でもウィンストンのように，その苦しみを「他者に回せ」などとは決して口にしないだろう。ジュリアの「結局自分のことしか考えていないのよ」(305) とウィンストンに吐き捨てられる言葉は，まさにウィンストンがナウシカとは違い，自己愛の塊で

あること，党に立ち向かい全体主義を覆そうとする救世主的な行動が，その自己愛の上に成り立っていた偽善に過ぎないことを証明している。

また，『風の谷のナウシカ』では巨神兵の存在が物語を大きく動かす。「火の七日間」で世界を焼き尽くしたとされる巨神兵はその描写や説明などからも核兵器の暗喩のようである。神聖皇帝ミラルパの兄ナムリスにより現代に蘇った巨神兵は単なる兵器ではない。当初ナウシカは巨神兵の破壊を試みるが，単なる殺戮兵器と思っていた巨神兵が，自らを「ママ」や「母さん」と慕い，ナウシカの表情や感情に呼応して破壊し破壊を止める無垢な「赤子」のような感情を持つことを知り，ナウシカと巨神兵との間に親子の絆が生まれる。巨神兵は人の心を持ち，ナウシカを母と慕う優しい「子」であり，巨神兵にとってナウシカは「母」であり，愛おしく守るべき存在で，それゆえたとえ自らが滅びようとも守り抜くことを選ぶ。この感情こそが人間の持つ愛情である。それはまるで核兵器が，ただ破壊と死を招く「死神」にも，あるいはナウシカが名を授けた巨神兵のような「優しい子」にもなりうるのは，その使い手によるのだと告げるかのようである。同時に，巨神兵は育て方によってその人間性が形成されるまさに人間の子供のような存在でもある。「機械に心はないと安心しているけれど，実は人は機械に心を与えている。忠実な心，無垢な献身，自己犠牲は，どんなに凶悪な主人にも犬が命令通り動くのと同じで，機械の本質になっている」（宮崎，525）という宮崎駿の言及から考えると，『一九八四年』の，国家の政策として作られ，スパイ団なるものを結成し自分の親すら密告するような非人間的な子供たちは，「心を持たない人間」につくられたが故に「心を持たないロボット」となっているのだろう。

『風の谷のナウシカ』において名前は重要な役割を果たしている。ナウシカは「赤子のような」巨神兵に，ナウシカの「言いつけを守って立派な人になる」(7 巻, 33) ことを条件に「オーマ」という名を与える。名を授かったオーマは急激に知的レベルを上げ，自ら状況を見据え，考え，裁定する「調停者にして戦士，そして裁定者」（7 巻，51）へと変化する。それほどオーマという名は，墓標によって「予定」され，つくられた “one of them” だった巨神兵に「個」を与え，命ぜられるがままでも本能の赴くままでもなく，自らで考え，選択し，判断するという人間らしさを与えたのだ。オーマがナウシカを母と慕い，従い，守るのは，ナウシカが単にオーマの作動装置を持っ

ていたからだけではなく，ナウシカこそが自分に名前を与え，一人の人格，「個」として初めて扱ってくれた唯一の人 “the one” だからだ。ナウシカは，オーマに「個」（“the one”）として問い，考えさせ，教える。この行動がオーマを「立派な人」へと成長させる。一時，オーマに墓標を破壊させる目的を持つナウシカは愛してもいないのに母のふりをしてオーマを欺いているのではないかと思い悩むが，そもそもそのようにオーマに対して思い悩む時点でナウシカはオーマを愛しており，ナウシカの心に呼応するオーマが彼女を慕うのは，オーマがナウシカから愛情を受けている証でもある。崩れゆく墓標の中で自分の命も顧みず目の前に横たわり死にゆくオーマに真っ先に駆け寄るナウシカの姿は，まさに母の姿である――ナウシカはオーマを愛していた。

一方，ウィンストンは「個」（“the one”）から単なる “one of them” になってしまう。ナウシカとは違って，ウィンストンは愛することを知らない。あれほど自分の承認欲求を満たしてくれていたジュリアにさえ，愛情を持ってはいなかったことが拷問の際の「彼女にやってくれ」という一言でわかる。ウィンストンには，ナウシカのような自己犠牲の精神は一切ない。ウィンストンが咄嗟に発したこの言葉は，彼が人間である間は，どんなに「愛されること」を切望していても「愛すること」を知らなかったことを意味している。彼が苦痛と引き換えに得たビッグ・ブラザーへの愛は，「個」として，つまり人間としての愛情ではなく，前述の宮崎駿の「どんなに凶悪な主人にも犬が命令通り動く」ような機械としての「忠実な心」，「無垢な献身」，「自己犠牲」に過ぎない――ウィンストンはビッグ・ブラザーを愛していた。

＜次回に続く。＞

主要参考文献

The Complete Works of George Orwell. Ed. Peter Davison. 20 Vols. London: Secker & Warburg, 1996 (1986).

Waddell, Nathan. *The Cambridge Companion to Nineteen Eighty-Four* (Cambridge Companion to Literature). Kindle Edition. Cambridge University Press, 2020.

Dick, Philip. K. *The Man in the High Castle*. Kindle Edition. Penguin, 2012 (1962).

宮崎駿．『風の谷のナウシカ』全７巻．東京：徳間書店，2010（1983-1994）＊本文引用では括弧内に巻数と頁のみを記載。

宮崎駿．『出発点』．東京：徳間書店，1997（1996）．

Room 101：1992 年 -1994 年まで BBC ラジオ，1994 年 -2007 年まで BBC でテレビ

放送された。

Big Brother：1999 年にオランダで放送された TV 番組。世界中で各国版が制作されている。

注

＊上記参考文献引用の和訳は全て筆者による。

＊ページ番号のみ記載の引用は George Orwell. *The Complete Works of George Orwell IX: Nineteen Eighty-Four*. London: Secker & Warburg, 1987 より引用。和訳は筆者による。

＊本稿は筆者既稿「創られた独裁者―プロパガンダの脅威 <1> ～ <6>」を参考している。既稿で言及のアニメ等の詳細は既稿参照。

＊引用内の大括弧は筆者による加筆説明。

BVEVHZUPVFMUREKFVIYSDLFMRJPQDFRHWVMYDSVQWLJTMWHUSXSYWPXTFHEVKQKCC